

審査の結果の要旨

氏名 小松 裕

本研究は総胆管結石に対する内視鏡的乳頭バルーン拡張術 (Endoscopic Papillary Balloon Dilatation; EPBD)による内視鏡治療の早期成績と長期成績、およびそれらに關与する各種因子の検討を試みたものであり、下記の結果を得ている。

1、EPBDによる総胆管結石治療の早期成績

1994年5月より2004年8月までに、総胆管結石症と診断した患者977例に対してEPBDによる内視鏡的胆管結石除去術を行った。EPBDによる総胆管結石除去を試みた977例中937例(95.9%)で結石の完全除去に成功し、EPBDの有用性を示した。一方、627例(64.2%)は1回のERCPで結石を完全できたが、82例(8.4%)では3回以上のERCPを必要とし、大結石、多数結石症例におけるEPBDの問題点も明らかにした。早期偶発症は977例中87例(8.9%)にみられた。急性膵炎は46例(4.7%)に合併したが、32例が軽症、13例が中等症、1例が重症であった。また、胆管炎を22例(2.6%)に、胆嚢炎を12例(1.2%)に認めた。輸血を必要とする出血は2例のみ(0.2%)で認めた。手技に伴う死亡は1例も認めなかった。以上EPBDが出血傾向を認める症例においても安全に施行できることを示すと同時に、EPBD後の膵炎にかかわる各種因子も解析、検討し、「膵管造影を行うこと」がEPBD後膵炎にかかわる因子であることを示した。また、EPBDの方法に関する検討では「バルーン圧8気圧で120秒間という拡張方法」と「バルーンのノッチの消失した時点で15秒間乳頭を拡張する方法」との比較で、結石完全除去率およびEPBD後膵炎の発症に関しては有意差を認めず、現時点で、「バルーンのノッチの消失した時点で15秒間乳頭を拡張する方法」がEPBDの標準的な手技になりうることを示した。

2、EPBDによる総胆管結石治療の長期成績

EPBDによる総胆管結石治療をおこなった977例のうち、EPBD後12ヶ月以上経過を観察できた785例を対象に予後調査を行った。785例のうち長期予後の調査が可能であった680例の長期合併症を検討した結果、平均観察期間51.2ヶ月で、680例のうち93例(13.7%)に、長期合併症を認めた。長期合併症の内訳は、胆管結石の再発25例(3.7%)、胆嚢結石の落下41例(6.0%)、胆管内の結石が明らかでない胆管炎10例(1.5%)、胆嚢炎12例(1.8%)、胆嚢結石の新生2例(0.3%)であった。5例(0.7%)が胆道系の悪性腫瘍で死亡していた(胆管癌3例、胆嚢癌2例)。長期的に乳頭狭窄を起こした症例は1例もなかった。以上今まで明らかでなかったEPBDによる総胆管結石治療の長期合併症とその内訳を明らかにした。ま

た長期合併症とその背景因子を多変量解析にて解析し、「有石胆嚢を放置したこと」、「結石破砕を行ったこと」が有意に長期合併症に影響を与える因子であることが示された。EPBD 時胆嚢結石を有していた症例の検討では、EPBD と同時期に胆嚢摘出術を施行した群と有石胆嚢を放置して経過観察した群で後期合併症累積発生率を比較検討すると、有石胆嚢を放置して経過観察した群が有意に高率であることが示され、結石再発にかかわる因子の検討では、多変量解析で胆摘術の既往のみが結石再発にかかわる危険因子であることが示された。

以上、本論文では EPBD による総胆管結石治療の早期成績および長期成績を解析することにより、現時点での EPBD による総胆管結石の内視鏡治療の有効性や問題点、治療後経過観察する上での注意点などを明らかにした。本研究は今後の総胆管結石の内視鏡治療の発展、確立に重要な貢献をなすと考えられ、学位の授与に値するものと考えられる。